

# 慢性疾患の子どもの学校生活を支援するための 指導法の改良

○<sup>たけはな</sup>竹鼻ゆかり（東京学芸大学）、佐藤千史（東京医科歯科大学）

## 1. はじめに

国内外において子どもの慢性疾患は増加傾向にあるにもかかわらず、慢性疾患の子どもに対する社会の理解や心理社会的サポートは乏しい。学校においても、生活習慣病などの予防教育は行われていても、病気とともに暮らす人々を理解するような教育はほとんどなされていない。そこで我々は以前、通常学級の中学生在が病気をもつ子どもを理解し、その子どもに必要な支援を考えられる指導法を開発、実践し、その介入効果を明らかにした<sup>1)</sup>。本研究の目的は、前回作成した指導法の改訂版を作成し、その評価をすることである。

## 2. 方法

某市立中学校の2年生全6クラス222人を、3クラスずつ介入群(111名)と対照群(111名)とに分けた。介入群には、介入授業の1週間前(以下、事前)に調査を行った後、授業前日に1型糖尿病を簡単に説明したパンフレットを配布した。翌日の授業時間に病気の理解を促す介入授業を行い、その直後(以下、事後)と1ヵ月後(以下、1ヵ月後)に事前と同様の調査を行った。対照群には、介入群と同日に調査(以下、事前)とパンフレットの配布を行い、翌日に調査を行った(以下、事後)。さらに1ヵ月後(以下、1ヵ月後)に事前と同様の調査を行った後、介入群と同様の授業を行った。なお、授業の内容は、グループ活動の内容や指示について、修正を加えた。

調査内容は、属性、「病気の友達の理解」「病気の友達の支援」2項目(100mmのVAS)、「認知的共感性質問紙(以下、共感性)」(6項目4件法)である。

研究の実施にあたり、東京学芸大学倫理審査委員会審査における承認を得た。また対象校の管理職ならびに教職員、生徒に対し、研究の趣旨を説明し同意を得た。

## 3. 結果と考察

(1)前回の結果と同様に、病気の理解、病気の支援、共感性については、介入群と対照群とで差は見られなかったものの、性別ではすべてにおいて男子より女子のほうが有意に点が高かった。そのため以後の分析は男女別に行った。(2)男子では、「病気の理解」「病気の支援」「共感性」ともに事前と事後に有意な差がみられた。また、「病気の理解」「病気の支援」において、介入群と対照群に主効果ならびに交互作用があった。女子では、「病気の理解」と「共感性」において、事前と事後に有意な差があり、介入群と対照群に主効果がみられたとともに、交互作用が示された。男女ともに2変数において交互作用がみられ介入の効果が示された。(3)男女ともに、事前と1ヵ月後に有意な差はみられず、継続効果については課題が残された。

## 4. 結論

改訂した指導法は直後効果があり、病気の子どもの支援するための指導法として、一般化できる可能性が示唆された。

\*本研究は、平成21年度—平成23年度科学研究費基盤研究(C)「1型糖尿病を持つ子どもの学校生活を支援するための教育プログラムの開発」(研究代表者:竹鼻ゆかり)研究成果の一部である。

\*研究協力者:澤井裕一、池田涼子、澤矢康宏(小平市立第六中学校)

E-mail ; takehana@u-gakugei.ac.jp